



思文閣出版
3,000円＋税

近代新潟における キリスト教教育

本井康博（大学神学部教授）著

周知のように函館、横浜、神戸、長崎とならんで新潟は最初に「開港」された港町である。それにもかかわらず今日からみると新潟だけが「文明開化」の面影が薄い。そのため新潟は、キリスト教の痕跡があまりない町であるかのように思われてきた。ところが、本書を見れば決してそうではないことが判明する。それを特に教育事業に焦点を当て、キリスト教教育が新潟で果たした大きな役割を描き出す。

ともに新潟を訪れたS・R・ブラウンとM・E・キダーを

じめ、新潟にゆかりのある宣教師や教え子たちが、横浜、東京、仙台など日本各地に残した教育的業績は目を見張るものがある。実はそのルーツが新潟にあることを本書は教えてくれる。

もちろん、新潟で開花した代表的キリスト教主義学校である新潟女学校と北越学館には、とりわけ多くの紙数があてられている。たとえば北越学館は、若き日の内村鑑三が赴任し問題をひき起こした学校としてしか一般には知られていなかった。それをアメリカの宣教師団や宣教師の資料を豊かに用いて、事件の真相をより明らかにした著者の功績は実に大きい。ここには、のちの同志社がかえる問題の一端が顔をのぞかせているということもできる。

すでに著者には、新潟に関して『近代新潟におけるプロテストタント』の著書もあり、本書は同書との姉妹作になっている。

鈴木範久（立教大学名誉教授）



法政大学出版局
3,000円＋税

生命というリスク

20世紀社会の再生産戦略

川越 修（大学経済学部教授）
友部謙一 編著

生命の始まりが、社会の関与で確かなものになることによって、かえって生命がリスクとして受け止められるにいたる経緯を7篇の力作によって浮かび上がらせたのが本書である。その経緯は、およそ次のように「紹介」することもできよう。

生命の危うさがその始まりに集中することは、以前から認識されていた。20世紀社会は、その「宿命」を制御しようとする。生命の始まりである妊娠・出産や乳幼児の死亡が危険として認識され、生命の危険に対する「改善」や「撲滅」が地域をあげて組織的に展開される。20世紀社会では、生命の始まりを

確実なものにしようとする働きかけが本格化するのである。

その過程で、当初は根強かった科学的な「指導」や啓蒙的な「心得」に対する人々の躊躇や疑念も、やがて生命の始まりへの関心と配慮に転化し、日常的な営みに組み込まれる。生命の始まりをより確かにする営みは、日々の生活選択の積み重ねでもあるが、その選択によって、新たな危険がもたらされるとき、生命はリスクと受け止められる。出産のリスクを回避する絶えざるモニタリングが新たなリスクを生むだけではなく、選択の結果が自らに帰責され、選択の範囲が避妊や中絶にまで及ぶからでもある。

本書は、生命の選択をめぐる現場の葛藤と、「人口減少」をめぐる価値判断とが引き裂かれている現状において一貫して現場から考える道筋を追求している。本書に収められた7篇が描き出す、生命の始まる現場のディテールを読んでもらいたいと思う。

中川 清（大学政策学部教授）



学術出版会
5,600円＋税

ハワイ日系2世と キリスト教移民教育

戦間期ハワイアン・ボード
のアメリカ化教育活動

吉田 亮（大学社会学部教授）著

本書は、1920年代～30年代にハワイのホスト社会が日系移民の子弟（2世）をいかに受容していったかをキリスト教教育の観点から考察した労作である。アメリカで日系人がまだ人種差別の対象であった時代に、ハワイでは、キリスト教を背景とした「国際主義」が広く受け入れられ、白人教育者や、宗教家たちが、異民族間の交流を促し、ハワイ社会の人種的・文化的融合を試みた。これらの人々は教育を通して「融合」を成功させ、最終的にハワイを世界の平和的共存のモデルにしようとした。また、同志社で学んだ日

本人伝道者がハワイに多数渡っており、彼らは、白人国際主義者と協調しながら、日系2世を有用なアメリカ市民にするための活動を行った。

7章構成の本書は、序章および1、2章では運動の中心となった人々の思想を深く洞察し、3、4、5章では、実践例であるスアヌYMC A、ミッドパシフィック学院、クロスローズ教会を分析している。最終章では、この壮大な「実験」が越境した例として同志社布哇寮に焦点を当てている。全巻を通じて数多くの新発見や、新解釈が提示されているが、ひとえに一次資料を丹念に探った地道なリサーチの賜物であると言えよう。各章の後には、膨大な註がついており、末尾の参考文献も充実している。

最後に、本書は研究者向けの専門書ではあるが、比較的平易な文体で書かれており、また、実在の人物の理念と行動の物語でもあるので、ハワイや、日系人、同志社の歴史に興味を持つ一般読者にもお勧めする。

物部ひろみ（大学言語文化教育
研究センター講師）



森北出版
3,600円＋税

Rによる データサイエンス

データ解析の基礎から最新
手法まで

金 明哲（天文学情報学部教授）著

「データサイエンス」聞き慣れないキーワードであろう。データの解析に関することを指すのだが、統計学では魅力的でない。統計学者の故林知己夫先生（元統計数理研究所所長）が「データに語らせる」ために「データの科学」を提唱した。本書では「統計的データ解析法十近年のデータマイニング手法」として、データから有益な情報を見いだす手法群をこう言っているが、単なる訳語ではなく「データの科学」と同義語なのである。

フリーソフトウエアR言語は、統計的データ解析やそのグ

ラフィックスのためのプログラミング言語兼ソフトウエア環境である。金先生はR言語が日本で普及する前からのヘビューザーで、論文のデータ解析のすべてをこれで行っている。その経験からR言語の紹介記事を、啓蒙活動を兼ねて月刊誌「エスチーラ」に5年間に亘り執筆してきた。本書はこの記事をコンパクトにまとめたあけた力作である。

本書は2部構成で、第1部はR言語の基本的な使い方、第2部はデータマイニングの手法群の解説である。第2部に大部分のページを割き、様々な基本的統計手法や機械学習に関する手法群を紹介している。近年のデータ解析手法を網羅的に学習し知識を得るためには格好のテキストである。また説明の記述、例題等を含めて非常にわかりやすい。数学・統計学的な背景の学習にはさらに専門書を当たらねばならないが、データ解析手法の入門書としては非常によい。

中村永友（札幌学院大学教授）

中川 清（大学政策学部教授）



萌書房
1,900円＋税

グローバリゼーションを生きて —国際政治経済学と想像力—

小野塚佳光（大学経済学部教授）著

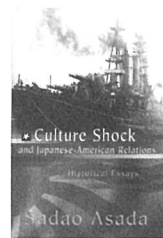
本書の目的は、グローバリゼーションをその可能性を含めて全体として理解することにある。グローバリゼーションはグローバルイズムというイデオロギーの実現過程であって、ありうべき世界の「一つではないから」、こうした作業が必要なのである。

本書の前半は、著者が開設しているウェブサイトをIPEの果樹園の記事を加筆再編したものであり、後半は、中央アジア、中国、イングランドの調査旅行を材料にしている。どちらも、様々な現実との出会いの中で、国際政治経済学（IPE）の考え方や想像力を使ってグローバルゼーションを理解しようとした成果であるが、著者のウェブサイトの密かなファンとしては、本書のユニークさは特に前者にある。まず、内外の新聞

記事、雑誌を題材に展開される著者の思考世界は、極めて自由でそれ自体が面白い。また、著者の目論見どおり、グローバルゼーションに関する論争のソース・ブックとしても役立つ。

IPEの考え方を学べることも、本書の大きな意義である。著者が述べているように、IPE系も、定義されない、明確な体系もない、比較的新しい学問領域であるので、IPEによって現実の諸問題を検討するプロセスを実際に見て学ぶことが重要である。例えば、「政治的視野を拡大する」「帰属意識と社会参加」（第2章）は、IPEの考え方の実際を知る格好の材料である。巻末の読書案内もうれしい。著者は、国際政治経済上の事件あるいは日常で出くわす他愛ない事柄から出発して（触発されて）グローバルゼーションをとらえようとする。その中で誠実に悩む時には戸惑う。その様子を垣間見られることも、本書の大きな魅力となっている。よりよい社会を構想する際に、グローバルゼーションの世界の登場人物たちに注ぐ著者のまなざしは実にやさしく、多くの読者の共感を呼ぶことであろう。「読み手の想像力を刺激する仕掛け」という著者のねらいは、達成されている。

谷村智輝（大学経済学部准教授）



Columbia, Missouri:
University of Missouri Press
5,609円～8,454円（税込）

Culture Shock and Japanese-American Relations Historical Essays

麻田貞雄（大学名誉教授）著

日米関係史、とりわけ日米海軍史を専門とする碩学の、積年の論文の集大成である。

本書は、著者自身の留学体験から始まり、1920年代の日米のパーセプション・ギャップの問題から、海軍戦略家アルフレッド・マハンの影響、真珠湾奇襲攻撃に至る両国の海軍関係、そして、原子爆弾投下問題をめぐる日米のパーセプション・ギャップと、論が進んでいく。著者の豊富な留学体験につ

いては、日本語で最近『リベラル・アーツへの道』（晃洋書房、2008年）が刊行されているし、海軍史を中心とした研究では、吉野作造賞受賞の名著『兩大戦間の日米関係』（東京大学出版会、1993年）が出版されている。本書は両著の英文によるエッセンスの趣きがある。「世界で最も重要な二国間関係に関する、個人的省察と歴史的分析的刺激的な混合」と、マイケル・アーマコスト元駐日米大使（著者のカールトン大学時代からの旧友）は、本書を称している。

今や英語で著書や論文を出版する日本人学者は少なくないが、著者ほどの筆力をもつ者はきわめて稀である。しかも、その英文の行間からは、歴史を彩る人物群像が鮮明に浮き彫りになっているのである。

村田晃嗣（大学法学部教授）



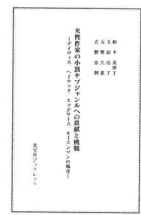
晃洋書房
3,000円＋税

リベラル・アーツへの道 —アメリカ留学とその後—

麻田貞雄（大学名誉教授）著

同志社大学法学部でアメリカ外交史を担当してきた麻田貞雄名誉教授は、同志社高校を卒業するとすぐ、グルーア奨学生としてカールトン大学に4年間留学し、優等で卒業した。さらにイエールの大学院で5年間外交史を専攻して博士号を取得、今なお国際的なレベルで活躍する外交史家である。麻田氏は米国で受けた教育の本質を、大学院を含めて、リベラル・アーツ教育だったと主張する。それが麻田氏の根本的な信念である。

では、リベラル・アーツとは何か。一般の大学人はそれを漠然と知っているが、留学の経験



英宝社ブックレット
1,900円＋税

女性作家の小説サブジャンルへの貢献と挑戦

—デイヴィス、ヘイウッド、エッジワース、オーエンソンの場合—
玉田佳子（女子大学文学部教授）著

本書は18世紀から19世紀初頭のイギリスで活躍した4人の女性作家を扱う。小説が文学ジャンルとして成立しつつあったこの時期に、教訓小説、誘惑小説、地域小説といった、本書の言う「小説サブジャンル」の構築、発展に、女性作家はいかに関わったか。これが本書の問題意識である。

玉田氏（女子大学文学部教授）は、1720年代に活躍したデイヴィスの作品をとりあげ、女性および女性作家に対する社会的、文学的制約が厳しい時代に、その制約ゆえに「偽装」という女性作家独自のレトリック

のある人であっても、それを自覚的に捉えて実践している人は案外少なく、卒業後もそういう生き方をしている人はなおさら少ない。本書はリベラル・アーツの生き方の実践記録である。麻田氏は9年間の留学生生活をマラソン選手のように走り抜いた。新島襄と同様、9年間一度も帰国しなかった。いろんなアルバイトをし、危険な目にも会った。しかし、ヒッチハイクの経験を含め、すべては彼にとって「アメリカ研究」であった。彼は米国で「人の情け」（米国人の）を身に沁みて経験した。本書は帰国後の強烈な逆カルチャー・ショックをも正直に記述している。

大変な読書家である麻田氏は、読んだ本から自由自在に引用する。本書には学術書を思わすほど見事な注とインデックスがついている。まことに本書こそは「読みごたえのある、筋金入りの留学記」である。

北垣宗治（大学名誉教授）

クが案出された」と主張する。デイヴィスの『札付きの放蕩者』では、放蕩者の改心を主題とする教訓物語という「表」の物語の「裏」に、息子の母親からの精神的自立の物語が隠されており、同時にまた、随所に「女性の力や強さを示す小さなストーリー」が密かに組み込まれていると云う。氏は、実にエレガントに、「偽装」という語りを解明する。

一方で、女性のセクシュアリティを肯定的に描いたヘイウッドは、非難中傷を浴びた。その実、男性作家に多大な影響を与えたことを五幣氏は例証し、文学史の書きかえを迫る。

吉野氏は、「異種混合の」ブリティッシュ・ネイションの形成過程と小説のジャンル形成過程を並置し、「地域小説」「歴史小説」を精緻に分析する。鈴木氏は、異文化融合の物語という語りの枠組みを論じ、その変容を追う。

小説は今も進化し続ける。本書は、その原点のスリリングな現場を今日の視点から論じた、活きのいい研究書である。

一ノ谷清美（名城大学准教授）

春秋社
2,000円＋税

だれも知らなかった 「百人一首」

吉海直人（女子大学文学部教授）著

百人一首の解説書というところ、和歌の注釈、歌人の生い立ち、文法説明といった内容を思い浮かべるのが一般的だろう。ところがこの本には、そのような解説は見当たらない。本を開くとまず目に入るのは、たくさんのカルタの写真。本書は、大衆文化の一つとなった百人一首の歴史を、成立と流通の側面から紹介する、新しいスタイルの百人一首研究書である。

百人一首は、利用価値の高い「商品」だった。カルタのみならず、大衆向けの双六、色鮮やかな浮世絵、川柳、宝塚女優の芸名、小倉館や立田揚といった食べ物名称まで、百人一首の

活用用途は意外なほど幅広い。

実は、百人一首がこれほど高い評価を得た背景には、ある中世歌人の「戦略」があった。本書前半では、その人物が明かされる。百人一首は、漫然と世に広まってきたのではない。百人一首に作品集としての独自の魅力があることはもちろんだが、百人一首を歌道の正統なパイプに仕立て上げた仕掛け人も存在したらしいのだ。「日本古来の優美で貴族的な文化」の代表格として百人一首を権威付けた人物、それが本書から浮かび上がってくる。

かくして日本文化を代表するパイプとなった百人一首は、その権威と知名度ゆえに、庶民向けに商品化され、さまざまな形で流通されるようになる。歌道というジャンルを超えて、日本文化を創り出す豊かな源泉となってきた百人一首。その意外な奥深さと、懐の広さに気づかされる時、読者は百人一首の新たな魅力を発見できるに違いない。

雨野弥生（天文学部研究科博士課程）

法律文化社
2,300円＋税

ホスピタリティ精神の深化

おもてなし文化の創造に向けて
山上徹（女子大学現代社会学部教授）著

本書はホスピタリティというキーワードをもとに、広義で横断的なホスピタリティ事業を研究対象として、当該事業分野の内的・精神的な課題を追求した論考である。構成は、第Ⅰ、Ⅱ部に分けられている。

第Ⅰ部は「ホスピタリティのコンセプトとホスピタリティ精神」と題して、ホスピタリティ概念や、「ホスピタリティ力」に必要な3要素（ハード、ソフト、ヒューマン等）について解説が行われている。また茶道文化や伝統的な経営管理の手法、あるいは昨今注目されるコーチング等の方法論と、ホスピタリティ概念との関係性を考察している。

第Ⅱ部は前章の定義に基づ

き、「ホスピタリティ事業とホスピタリティ力」と題して、宿泊産業、医療事業、スポーツ事業、および都市観光事業における「ホスピタリティ力」の有効性について論じている。

第Ⅲ部は「観光の活性化とホスピタリティ精神」と題され、昨今増加しつつある中国人の訪日観光と、日本人の北京観光の双方方向についての活性化をホスピタリティの視座から捉えた論考である。北京観光に関してはSWOT分析を行い、活性化への課題と提言が論述されている。

各章には学習のポイントやコラムも配されており、主にホスピタリティ関連科目の教科書として著されたものと拝察する。本書はホスピタリティ概念と、古今東西の文化論、経営管理論、観光現象等との相互・関係性について、多面的に考察を試みた労作である。ホスピタリティを冠した出版物は多いが、学術的な論考を纏めた図書は少ない。今後のご研究のさらなる進展と成果を期待したい。

杉田由紀子（流通科学大学教授）

明石書店
1,800円＋税

シミュレーション教材 「ひょうたん島問題」

—多文化共生社会ニッポンの学習課題—

藤原孝章（女子大学現代社会学部教授）著

日本では、少子高齢化社会の到来により、単純労働分野では外国人労働者への依存度が高くなっている。外国人登録者数は200万人を超え、外国籍住民比率の高い市町村が増えている。換言すれば、多文化共生型に移行せざるを得ない地域社会が各地で簇生しているということである。ところが、そうした地域社会の変容に学校教育や居住環境をはじめ、各種の行政施策や日本人住民意識の対応が進んでいるとは言い難い。

藤原孝章は国際理解教育やシティズンシップ教育分野での教材開発等、実践的な教育研究の

第一人者としてつとに知られる。「ひょうたん島問題」は藤原の高校教師（社会科）としての長年の経験が随所に発揮された格好のシミュレーション教材である。「ひょうたん島」という、海を漂う架空の島に「カチコチ島」や「パラダイス島」の言語も文化も習慣も異なる人々がマイノリティとして移住してくることで、マジョリティの平穏な暮らしに様々な軋轢が生じ、社会は混乱する。この「ひょうたん島」を舞台に、学習者は、日本社会でのマイノリティの人々に対する現実的な課題を、それぞれの立場からロールプレイすることで、問題解決への方策を現実的に考えることができるように本書は巧みに、かつ楽しく構成されている。

以上の「第1部実践編」に加え、「第2部理論編」および「第3部資料編」も参考にすることで、「ひょうたん島問題」を多角的に理解できるPrimerとしても秀逸である。大人が自らを啓発する教養書としても是非本棚に供えたい一冊である。

本多千明（聖トマス大学准教授）

昭和堂
2,400円＋税

教職論

—これから求められる教員の資質能力—

石村卓也（女子大学教職課程センター特任教授）著

今、学校は、統廃する社会問題や変化する子どもの現状そして新規の教育施策などに深く関わる、複雑多岐な課題に直面している。また学校教員には、様々な諸課題に主体的に取り組む高い資質能力が求められている。その資質能力には、より豊かな人間性・広い社会性・高い専門性ならびにより大きい情熱・強い使命感などがあげられる。これらは素質とは異なり、後天的に形成可能なものとされている。それゆえ、大学での教員養成への期待は益々高まっている。

本書では、教職の意義や関係法令、制度や現状などが語られる。とりわけ教職観や教員養成の歴史及び教育改革などの章では、入手が困難な資料も駆使しつつ、説明の主軸を教職は教育専門職であるのとらえ方から詳述されている。これは、表には出されていないが、筆者が、教員養成担当者として公立学校での豊かな勤務経験を踏まえて、次代の教員に要望するものを強く意識して著されたものと考ええることができる。また、法令・制度など他の章の解説部分は、網羅的なほかかつ各項目の要点を的確にまとめられている。これらは、教職志望者が教養として学ぶべき事項というだけでなく、現職教員が机上に置き便覧的に活用できる内容も兼ねている。さらに教員採用試験関係の記述もあり、本書は、教員養成に必要な内容と教員志望者への熱い思いが凝縮された労作といえる。

岩田 貢（龍谷大学教授）



正岡子規
斎藤茂吉
内藤 明著
晃洋書房
2,700円＋税

新しい短歌鑑賞第二巻 正岡子規 斎藤茂吉

安森敏隆 (女子大学文学部)
内藤 明著

本書は、近代日本の高名な歌人・正岡子規と斎藤茂吉の代表作に対し、論者の清新な観点による鑑賞を試みた好著である。

子規は内藤明、茂吉は安森敏隆が担当。それぞれ、「正岡子規継承と創造」「斎藤茂吉ヨーロッパそして日本」と題した総説において、作者の生涯と文学史的評価をまとめた後、1首に1頁ずつ、計50首を鑑賞している。それらの味読ぶりからは創見がしばしばうかがえ、短歌鑑賞の方法や視点の据え方について教えられるところが多かつ

た。

続く「歌集案内」は著者が各歌集などから選択した秀歌が収められ、「歌論案内」には代表的な、子規と茂吉の短歌論が摘録されてある。付録として資料、年譜も記され、初学者にも読みやすい構成なのがあるがたい。

本書を含めた『新しい短歌鑑賞』シリーズを監修している共著者の安森敏隆は、同志社女子大学で近代文学を講ずる一方、第一線で活躍中の歌人としても知られる。既に斎藤茂吉をめぐる主著が2冊刊行されているのは周知のことであろう。

そんな安森による総説、鑑賞は、斎藤茂吉の文学世界をあますところなくとらえた信頼できる内容であり、幅広い読者層の共感を呼ぶものと思われる。多くの短歌を愛好する人々に読まれることを願ってやまない。

外村 彰 (滋賀大学講師)



金芳堂
1,800円＋税

薬と臨床コミュニケーション

— 新人薬剤師・研修医

村上元庸 (女子大学薬学部教授、
芝田信人 (女子大学薬学部教授、
横出正之編

最近、医療現場への患者やマスコミからの風当たりは強く、薬害、インフォームドコンセント、医療事故等の活字が紙面を賑わすことも多い。患者中心の医療と言われながらも十分に患者とのコミュニケーションがとれていないのもその要因の一つと思われるが、今回、医療現場での会話を想定したクイズ形式の書籍が発行された。

本書は「この薬はいつまで飲めばいいのでしょうか?」「ステロイドって怖い薬なんでは

よ?」など患者の切実な疑問が数多く取り上げられている。「さて、あなたならどうする?」と4つの解答から正解を選択するのであるが、患者の求めているものをコミュニケーションの中から把握してその対応の正否を問う。また本書は神経・精神、循環器、消化器、関節リウマチ、呼吸器、糖尿病、感染症等の9領域に分類し、薬を通じて患者と病気を簡潔にまとめている。執筆はそれぞれの領域で活躍されている医師、薬剤師が担当されており、興味のある質問のどこからでも読み始めることができる。さらに所々にある編者のコラム欄もなかなか面白い深い。クイズ感覚で楽しみながら知識や技術のチェックができるので新人薬剤師や研修医、さらに薬学部学生や医学部学生のコミュニケーションスキルを磨くために是非活用していただきたい。

杉井彦文 (社会保険京都市病院薬剤部)